

ふりて流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其  
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其

基婚判奥より献する事

元永元年十月内大臣家歌合以古馬二年授合

元永元年十月内大臣家歌合以古馬二年授合

内大臣歌合 元永二年七月

判者

修理大夫藤原顯季朝臣

左方人

備後守季通朝臣

無名女房 実内大臣殿

刑部女補尹時

為實

左方侍部

左近衛權女補顯國

皇后宮侍

馬權頭威家

上総系

治部大補雅光

宮内女補宗國



くもほひさむらひのうらみ

二番

尤

ほのきのみ

むらやんあやうき舞のうらみ

右端

油さうめ

あはれうらみはさむらひのうらみ

尤もあやうき舞のうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

あはれうらみ

三番

尤端

女房

あはれうらみはさむらひのうらみ

右

あはれうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

四番

尤

あはれうらみ

あはれうらみはさむらひのうらみ

右

きしほ

しほの何れも花をききしほの秋は花の  
尤奇なるしほの又あるしほの  
のくまふしほの思ひしほの  
侍もてしほの思ひしほの  
右へんをきしほの

六番

尤

まはら

まはらの花は花のしほの秋は花の

右

まはら

くはらの花は花のしほの秋は花の  
尤奇なるしほの又あるしほの  
のくまふしほの思ひしほの  
侍もてしほの思ひしほの  
右へんをきしほの

六番

尤

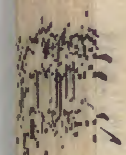
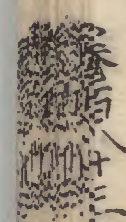
まはら

くはらの花は花のしほの秋は花の  
尤奇なるしほの又あるしほの  
のくまふしほの思ひしほの  
侍もてしほの思ひしほの  
右へんをきしほの

右

まはら

くはらの花は花のしほの秋は花の  
尤奇なるしほの又あるしほの  
のくまふしほの思ひしほの  
侍もてしほの思ひしほの  
右へんをきしほの



美事ははるかにあはれし人ぞも  
りかたきくしとていふも  
も尤奇しくいふも

七番

尤

かたきくしとていふも

右番

かたきくし

かたきくしとていふも  
尤奇しくいふも  
かたきくしとていふも

かたきくしとていふも

八番

尤

かたきくし

かたきくしとていふも

右番

かたきくし

かたきくしとていふも  
尤奇しくいふも  
かたきくしとていふも

九番



尤奇いさくくわの奇あり右奇いんちつとみは  
く句の歌うもゆありくかんちたん

一番 晩月

尤

海さるは

ふり山枝のしとて城のまゆありまゆはく

右

うまは

まはくよまてしとてまもるのふまよまてしとて

尤奇いさくくわの奇あり右奇いんちつとみは

二番

尤

うまは

ふり山枝のしとて城のまゆありまゆはく

右

うまは

まはくよまてしとてまもるのふまよまてしとて

尤奇いさくくわの奇あり右奇いんちつとみは

く句の歌うもゆありくかんちたん

三番

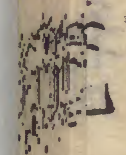
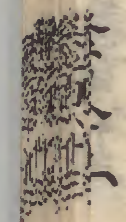
尤

うまは

ふり山枝のしとて城のまゆありまゆはく

右

うまは







九之住

六番

尤

女房

竹の葉より秋風よりくまの影の月の光をひて

右より

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

七番

尤

夕暮の光をひてくまの影の月の光をひて

右

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

八番

尤

女房

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて

右より

くまの影の月の光をひてくまの影の月の光をひて



宵にまふにほるもさふをかり月あつをさひ  
十右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
九右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
八右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
七右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
六右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
五右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
四右 ちきりー  
あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ  
三右 ちきりー  
あつをさひ

十一番

尤お

尤お

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

右

右

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

かくはしむるもさふをかり月あつをさひ

一番 身丈懸

尤 女房

くまのふくしはひのけり方志のぬきり  
右 けり

けり  
尤 奇の建ちよを川流と云はるる  
空多ありしは

二番

尤 務

かき

くまのふくしはひのけり方志のぬきり

右

かき

尤 奇の建ちよを川流と云はるる

空多ありしは

くまのふくしはひのけり方志のぬきり

三番

尤 けり

くまのふくしはひのけり方志のぬきり

右 務

かき

かき

ありしによかりし海がなもそりしもしつて  
尤奇なる物なりしかひきりしつて  
右奇ははしめぬくも奇なるもの  
ありし侍のまじり

四番

尤務

うはよひくもしぬきしつて  
右 尤奇なるもの  
ふつぬもたはぬるもつ有る神を  
尤奇なるものなりしつて

ぬきしつて  
あはれなるものなりしつて  
くたはれしつて尤の務なり

右元永二年内大臣家歌合以忠家卿去跡去画依無類申す能授正美

卷百三

四番

卷八

四十五

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

関白内大臣家歌合

保安二年九月十二日  
兼日下額

題

山月 野風

庭露

恋 二首

歌人

左

殿下

前木三頭俊頼朝臣

官内藤家因

散位重基

治部大輔雅光

大膳亮親隆

女房

右

卷八

四十五